クジラを釣りに

登場人物

セフィロス

クラウド

舞台

海岸のそばの部屋。壁は非常に明るい青に塗られている。右手に大きな張出し窓。窓は開いていて、純白のレースのカーテンがかかっている。窓のすぐ下にベッドが置かれている。中央に大きなソファとテーブル。ソファはたくさんのクッションで飾られている。テーブルのまわりに、トランクがいくつか積んであり、背の高いランプがある。左手にドア。

舞台はこの部屋ひとつであり、この部屋のみですべてが展開する。各場面ごとに、完璧なヴァルールが要求される。おのおのの場面は、一枚の完璧な絵のようでなければならないのだ。

どの場面においても、絶えず波音がしている。

第一幕

第一場

午後。部屋は黄味がかった白さに包まれている。壁の青さは少し緑がかって見える。カーテンは絶えず誘うように揺れている。

クラウド、ベッドに座り、窓の外を熱心に見つめている。セフィロスはソファに座っている。

クラウド　ずっと波の音がする。

セフィロス　（ちょっとふざけて）海辺ははじめてでいらっしゃいますか。

クラウド　はじめてどころの騒ぎじゃないよ。海ってこんなにでかいの？

セフィロス　確かにずいぶん大きい。おれもはじめて見たときは驚いた。

クラウド　（ふり返って）それいつの話？

セフィロス　十代のころだ。いつだったか……戦場に向かう途中だった（微笑む）。

クラウド　なんか意外。あんた、あちこち出かけてるほうかと思ってた。連れ回されてるっていうか。

セフィロス　おれはほとんどミッドガルから出たことがなかった。子どものころのことはあまり覚え

ていないが……こんなふうになにかの任務でなく海辺に来たのもはじめてだ。我ながらバランスの悪い話だな。

クラウド　おれ釣りがしたい。したことないもん。

セフィロス　ご自由に。おまえの休暇はまるまるあと十日残っている。

クラウド　おれのなんだよなあ。あんたのじゃなくて。なんか変な気がする。

セフィロス　なぜ？

クラウド　自分が働いてるなんて信じられないから。休みもらうとか、もう休みは終わりだとか、明日からまた仕事だとかさ、そういうこと自分が云うようになるなんて、なんか変だよ。

セフィロス　軍役を一般の仕事と同列に置いていいものかどうかわからないが、おまえが軍隊にいることは確かにおれにも信じられない。

クラウド　だろ？　なんだかんだでもうすぐ二年になっちゃうんだ。二年か。おれの人生変わりすぎた。

セフィロス　（クラウドを見つめたまま物憂く笑って）おれもだ。

クラウド　（ベッドから降りて立ち上がり）海見てくる。あんたも行く？

セフィロス、うなずいて立ち上がり、ふたりともドアから退場。

第二場

真夜中。部屋は青暗く、銀色の月光が窓から舞台中央のテーブルにまで帯になって入りこんでいる。ベッドシーツの白さ、カーテンのレースの白がくっきりと浮かび上がる。純白に、神秘的だがはっきりと白い。部屋のどこにも影があってはならない。

セフィロスとクラウド、ベッドに並んで腰を下ろしている。クラウドはバスローブ姿で、セフィロスは白いタオルで彼の頭を拭いている。

クラウド　おれ体じゅうしょっぱくなった気がする。

セフィロス　あれだけ海に浸かっていればな。

クラウド　指先、まだふやけてる。（セフィロスの目の前に手をさし出す。彼はさし出された指にキスして、髪を拭く仕事を続ける）

間。

クラウド　あと何分くらいだと思う？

セフィロス　そういえば時計をもってくるのを忘れたな。

クラウド　カレンダーもね。この部屋、どっちもないんだもんな。そんな部屋ある？

セフィロス　今日びめったにないのは確かだ。おれは両方ともなくてもちっともかまわないが。（タオルを置く）
クラウド　まあ、あんたが時間で生きてないのは確かだよ。十日後にさ、おれたち十日経ったって気がつくかな。
セフィロス　気がつかないならそれはそれでいい気がする。なんだかおれはここでこのまま永遠が過ぎてゆくような気がするんだ。
クラウド　波の音のせい？
セフィロス　そうかもしれない。そうするとおまえは十六になったばかりで時が止まって、永遠に十六になりたてのままだろう。
クラウド　（顔をしかめて）やだな、それ。せめて十八になりたい。
セフィロス　なぜ？
クラウド　だって十八になったらさ、みんな自由になるんだ。借金だってできるし、借金した金みんな賭けてすっちゃうこともできる。十七歳と三六四日までと、十八歳とゼロ日でなにが違うのか、おれにはわからないけど。
セフィロス　昔、日付が切り替わるときになにか境界線でもあるだろうかと思って、ずいぶん考えた。

クラウド　ああ、あんたの考えそうなことだね。
セフィロス　結局のところ、そんなものはないんだが。区分なんて恣意的なものだ、なにもかも、すべてが。人と人とのあいだでさえも。
クラウド　おれまだ海の匂いする？
セフィロス　（クラウドの髪に鼻先を近づけて）するような気がする。でもおれの鼻が一日じゅう海辺にいて馬鹿になったためかもしれない。（そのまま鼻先がクラウドの耳元や頬を伝ってすべってくる）おまえが海の匂いなのだろうか。海がおまえの匂いなのだろうか。
クラウド　（くすぐったそうに）あんたいつだか森っぽいって云わなかった？　おれの匂い。
セフィロス　云った。そのときのおまえは霧がかった明け方の森のようだった。おまえはいつの間にかその土地の匂いになってしまう。山の、森の、水辺の、土の、火の匂いにおまえは変わる。それでおれはおまえがどこにいるのかわからなくなりかける。ときどきこう考える……おれはそのうち、おまえをいつも探し回らなくてはいけなくなるのではないかと。
クラウド　おれはあんたのことどこにいても見つける自信ある。でかいもん。
セフィロス　自分がこんな大きさとは不当だという気がよくする。おまえぐらいのころ、身長を測るたびに、次はきっと止まるだろう、きっともう伸びないだろうと思っていた、祈るように。成長ほど暴力的なものはない。無情に過ぎてゆく時間がいつの間にか体を変えてしまう。子どもから大人へ、

大人から老人へ……（ふいにクラウドをしげしげと見つめ）おまえはまた背が伸びたな。おまえの体が成長を止め、おれが老いてゆくのをやめたら、永遠があらわれるだろうか。試してみたいような気もする。

長い間。カーテンが揺れ、月光がやや不安げに揺れる。

クラウド　……もう夜中になったと思う？　日付変わったかな？

セフィロス　わからない。おれの勘ではそろそろだという気がする。

クラウド　じゃ、きっとそうなんだ。おれもう十六になった。十六年も生きた。ざまみろ。

セフィロス　ざまみろとは、誰に対して？

クラウド　村のヤブ医者。おれ生まれて一年かそこらで病気したんだって。で、ヤブ医者が云うには、とても助からない、もってあと二、三日だから、みんなにふれてまわったほうがいいって母さんに云ったんだって。それ聞いた近所のやつが勝手に葬式の準備しはじめて、母さんブチ切れて、あやうくそいつのこと斧で真っ二つにするとこだった。みんな真っ二つに割られりゃいいんだよ、あんな村のやつら。

セフィロス　（ひっそりと笑って）味わい深い話だ。

クラウド　でもおれは生き延びた。十六年も。ざまみろ。村のやつらが全員死ぬまで、おれ絶対死んでやらない。おめでとうって云ってよ。

セフィロス　おめでとう、ニブルヘイム村の災厄どの。
　セフィロス、クラウドを抱きしめる。レースのカーテンが優しく揺れ、部屋に差しこむ光も揺れる。
クラウド　明日、ううん、もう今日だけど、ちゃんと釣りしたい。沖に出るんだ
セフィロス　（うなずいて）舟を借りよう。小さな、丸い、ゆりかごのような舟。ゆらゆらと揺れる。
クラウド　おれ昼寝しちゃう自信ある。そしたらあんた釣り竿見ててくれる？
セフィロス　間の抜けた魚が引っかかったらおまえを起こそう。
クラウド　（あくびして）眠くなってきた。
セフィロス　（微笑んで）いい夢を。十六歳のクラウド。
　クラウド、横になる。セフィロス、ふとんをかけてやり、窓の外を見つめる。それからクラウドを見つめる。
　カーテンが揺れる。長い間。
セフィロス　おれは楽しみにしているのだろうか、それとも懸念しているのだろうか。ニブルヘイム……禍々しい気配をもった名。だがたまらなくなつかしくもある。まるですべての魂はそこからやって来たのだとでもいうような……おれに故郷などないのだが、わけもなくそこを故郷と呼びたくなる

ような。クラウドは山があると云った。山に魔晄炉があると云った。その山からでも、おれはやって来たのだろうか。魂は海から来るのだという者もあるが、おれの魂はどこから来たのだろう。つまり、おれの帰るべき場所がどこにあるだろう。（寝ているクラウドを見下ろして）この子の魂は間違いなくその山からやって来たのだろう。山にたちこめる霧と冷気とがこの子を生んだのだろう。燃えるようなこの魂を……おれの魂の秘密はこの子の中にあるような気がする。そしてこの子を生んだ場所に。なぜだろう。人が人に惹かれるのは運命なのだろうか。それは幸福のためなのか、破滅のためなのか、知らずにはすまない、魂に秘められた秘密を知るためなのか。ふたつの魂は上昇するのか、降ってゆくのか。いずれにしろ扉を開く鍵ならばおれはもう手にしている。きっとこの子がそれだろう。だが道はどこへ続いているのだろう。

窓から潮風がふきつける。セフィロス、窓の外を見やる。長い間。視線をふたたびクラウドへ戻す。

セフィロス　おれは信じたかった。すべてを自分の意志で選んでいるのだと。たとえほとんど選択の余地のない人生であったとしても。それでもおれはいつでも選ぶことができた。そして選んだ。それはたしかにおれの選択だった、意志はおれの手の中にあると信じた。だがほんとうにそうだろうか。この子を選んでからというもの、おれは確信をもつのと同じだけ疑っている。おれの意志は分裂してしまった。おれの感情も分裂してしまった。自分のなかに自分のあずかり知らない領域が生まれてし

まった……そしてそれがおれをおそろしい勢いで引きずってゆこうとしている。そんな気がする。

セフィロス、眠っているクラウドの頭をなでる。痛々しい間。

セフィロス　おれのたどりつく先は地獄なのか？　それともおれのなかにあるこれが地獄なのか。おれは地獄の生まれなのか。もとよりそんな気はしていたが……それならおれはこの子を地獄へ引きずりこんだのだろうか。だがこの子もまた選んだのだ、自分の意志で……いや……それも疑わしくなっている、いまとなっては。なにが人と人を引き合わせるのか。なにが運命を動かしているのか。なにが人をつき動かしているのか。意志であればよかった。意志か、あるいはとにかく人から出たものでありさえすれば。だがそんな気が少しもしない、いまのおれには。おれは自分で選んでいるつもりで、操られているだけではないかと……この子のことさえも……（首を振って）もうやめよう。なにも考えるまい。この子が十六になった、そして来年はまたひとつ歳をとるだろう。われわれは休暇のあいだ楽しむだろう。それだけを考えればいい。（あざけるように笑って）ああ、時間は死刑執行人であると同時に救主でもある。この地上のあらゆるものにかけられた呪いであるはずの時間。ついさっきまでおれは永遠を希求していたはずだが……永遠をもとめることは変化を不可能にすることだから……そうなれば、不安も消えるだろう、絶望も消えてなくなろう、おれはなにを気にしている？　信じろ、いまが永遠なのだと。

セフィロス、クラウドのとなりに横たわる。暗闇。波の音だけが聞こえる。

第二幕

第一場

夕刻。部屋は赤い。あらゆるものが影をしたがえている。壁の青は不安げな紫色に見える。
クラウド、ベッドに座って、釣り竿をしまう前の手入れをしている。セフィロスはソファにもたれるように座って見守っている。

クラウド　魚って思ったほど釣れないんだな。
セフィロス　はじめての海釣りで大漁になったとしたら、それこそえらいことだろう。
クラウド　おれ日焼けした。
セフィロス　日焼け止めを塗ったのに？
クラウド　背中が赤くなってた。たぶん、ちょっとシャツめくって寝転がったせい。
セフィロス　（考えこんで）服を着ている部分のことは考えなかった。おれの責任だ。おれが塗ったから。
クラウド　別にあんたのせいじゃないと思うけど、シャワー浴びたとき痛かった。日焼けって痛いんだ。知らなかった。こんがりするだけだと思ってた。

セフィロス　やけどだからな。冷やそうか。
クラウド　冷やしたほうがいいの？
セフィロス　きっと赤くなっているだろうから……見てみよう、おいで（手招きする）。
　クラウド、やってきて服を脱ぎ、セフィロスに背中を向けて彼の膝の上に座る。
クラウド　なんかひりひりするんだ。
セフィロス　ああ、赤くなっているな、かわいそうに。おれの不手際だ。（背中をそっと撫でる）
クラウド　いたっ！　触るなよ……うわっ、そこくすぐったい、やめろよ！
　ふたりともしばらくふざけて暴れる。ふたりして、セフィロスを下敷きに、折り重なってソファに倒れる。
セフィロス　あとで氷をもらいに行こう。寝る前にタオルを冷やして背中に置いてやろう。
クラウド　（眠そうに）うん……訊いていい？
セフィロス　なにを？
クラウド　あんたが最近なんで元気ないか。
セフィロス　もともとあまりはちきれそうなほうじゃないが。
クラウド　んなこと知ってるよ。おれ考えたんだ。
セフィロス　（愉快そうに）考えた！　おまえが！

クラウド　うるさい。（セフィロスを殴ろうとするが、腕をつかまれて下ろされる）
セフィロス　（真剣に）なにを考えた。どうもいやな予感がする。
クラウド　（すねる）どうせおれはもの考えるタイプじゃないよ。
セフィロス　（笑って）そういう意味じゃない。それがおまえの魅力なのは確かだが。それがどれだけ魅力的なことか、おまえにわかるといいのだが……。
クラウド　（いらいらして）そんなことどうでもいいよ。要するにさ、おれ思ったんだ、あんた、ニブルに行きたくないのかなって。
セフィロス　……それに「はい」か「いいえ」で答えるのは難しい。
クラウド　でも気乗りしないのはほんとだろ？
セフィロス　ほんとだが、その原因はたぶん、おまえが考えているようなものじゃない。
クラウド　じゃあおれがどう考えてるって思うわけ？
セフィロス　軍の仕事だから嫌なわけではないんだ。遠出が嫌なわけでも、面倒なわけでも、ましてやおまえの故郷に行くのは気が重いと思っているわけでもない。その件に関しては、おれよりおまえのほうがよほど気が重いはずだ。
クラウド　……。（ふてくされた顔をする）
セフィロス　ああ、クラウド、クラウド、そうじゃない、おまえはおまえの経験に自分なりの意味を

与える。それは確かにおまえのなかでとても重大な意味をもっている。おまえの気持ちがおれにわからないわけがない。ましておまえがソルジャーにならなくてよかったと思っているわけがないし、やめておけと云ったのになどと思ってもいない。おまえが試験に受からなかったことでおれは非常に胸を痛めているのだが、それはおまえが胸を痛めているからだ。さっきのは云い方が悪かった、許してほしい。もしおれがすでにソルジャーである立場から、あわれみか同情をもってそうでないおまえを見下ろしているのなら、それこそ地獄のはじまりだ。そんなきざしが見えただけでもおまえはおれを殺していい。実際、死に値する、誰であれ、おまえにそういう態度をとる人間ならば。

クラウド　（さっと身を起こして、くやしそうに）でもおれ試験のこと考えると腹立つんだ。だって、適性ってなに？　生まれつきのなんかでソルジャーになれるかなれないか決まっちゃうんだったらさ、入隊したときにそれ検査して、適性ないやつはその場で追い返せばいいんだよ。違う？　散々期待もたせておいてさ、人に頑張らせといて、ちょっと検査しただけで、どうも落第ですご愁傷様ですって云うわけ？　いつまでも腹立ててる自分にも腹立つけど、でも腹立つんだ。

セフィロス　そうだろうな。

クラウド　あんたなんでそんな冷静なんだよ。

セフィロス　（起き上がって、すこし突き放すように）おまえが感情的になっているから。見た目が冷静に見えるからといって、腹の中まで落ちついているとは云えないが。

クラウド　……。（うつむく）

セフィロス　おれにこれ以上の皮肉屋になってほしいのか？　なってほしいのならいくらでもなるが、おれ自身の願望を聞いてもらえるなら、なりたくはない。

クラウド　あんたのそういう云いかた好きじゃない。

セフィロス　じゃあどう云えばいい。それに、この際だから訊くが、どうすればいいんだ？　いつまでおまえを腫れ物みたいに扱えばいい？　おまえはおれの気が沈んでいると云うが……そしてそれは確かにそのとおりではあるが……おれに云わせればおまえのほうがよほど気遣わしい状態だと思う。

クラウド　（セフィロスをにらみつけて）ほっといてよ。（立ち上がってベッドに向かって歩いて行き、飛び乗ってセフィロスに背を向ける。膝を抱えて窓の外を見る）

非常に張りつめた間。緊張と息苦しさ。

セフィロス　（ため息）氷を探してこよう。（退場）

クラウド、膝に顔をうずめ、丸くなる。

第二場

真昼。白い光に覆われた部屋にはいっさいの影がない。空気は静止している。いっさいのものが動かず、影もつくらない。

クラウド、ソファに座って貝殻をいじっている。セフィロスはその横に座っている。

セフィロス　それで、無線はどこですかとそのバカが云った。

クラウド　で？

セフィロス　ザックスが怒って、てめえで考えろと云った。あの男があんなに怒ることはめったにない。おれは少し驚いたが、愉快でもあった。

クラウド　（顔を上げて）なんで？

セフィロス　人間らしさを感じるから。いつでも冷静沈着で、眉ひとつ動かさないというような人間は嫌いだ。なにが起きても、自分には関係がございませんというような顔をしているやつも。

クラウド　でもあんた、そういう人だと思われてると思うよ。

セフィロス　どうもそうらしいな。そのことを考えると皮肉な気がする。自分の顔がもう少し喜怒哀楽を豊かに表現してくれるような顔だちであればよかったのかもしれない、喜劇役者のように。

クラウド　（笑う）そんなの想像つかないよ。
セフィロス　（微笑んで）わが君がようやく微笑んだ。おれの心は晴れた。
クラウド　は？
セフィロス　なんでもない。おれはしょせんおまえの気分の奴隷なのだと云いたかった。
クラウド　……なんでまた蒸し返すようなこと云うの。
セフィロス　そうだな。うかつだった。うれしかったのでつい。
クラウド　（うつむいて）まあどうでもいいけどさ、別に。
セフィロス　（しばらく考えて）最近おれの気が沈みがちなのは、おまえとは関係のない原因によっている。
クラウド　なに、急に。
セフィロス　昨日のおまえの質問にちゃんと答えていなかったと思って。
クラウド　いま？
セフィロス　せっかく蒸し返したので。
クラウド　（あきれて）おれあんたのそういうとこ、ほんと、たまに、ぜんぜんわかんない。気遣ってんのか、なんなのか。
セフィロス　たぶん、おれはぎりぎりまでいわば紳士でいようとするんだろう。ところがある瞬間に

ふいにそいつをかなぐり捨てて、ありとあらゆる意味であからさまなやつになってしまう。おそらく、肝心なときには抑制という抑制が無意味なことをわかっているのだろうな、どこかで。おれはそれを楽しんでいるとさえ云える気がすることがある。対人関係においても、戦場においても。もっとも、対人関係でここまで進むことはめったにないんだが。

クラウド　よくわかんないけど、要するに、おれ貴重な人材なの？

セフィロス　（非常に真剣に）このうえなく。唯一無二といってもいい。

クラウド　なんか信じられないんだよな、あんたがそういうこと云うとき。まじめに云いすぎててかえって冗談っぽいっていうかさ。（貝殻をテーブルの上に置く）

セフィロス　だとすると、おれは生粋の道化なのだろうか。ふむ、考えたことがなかったが、考慮に値するな。

クラウド　いいよ、しなくて。なんの話だよ。

セフィロス　すまない、脇道にそれた。つまり、ここのところおまえにはおれの気が沈みがちなように見えただろうが、それはおまえのせいではなくて、冷たいようだがおまえに起きたことのせいですらなく、おそらくまったくおれ自身の問題なのだろうと思う。もっとも、それも非常に遠くまで進んでいくと、おまえと関わらないわけでもない気がするんだが……。

クラウド　ぜんぜんわかんない。

セフィロス　だろうな。どう云えばいいのかおれにもわからない。漠然とした不安、あるいは予感か？　どうもなにか重大なことが起きそうな予感にさいなまれている、とでもいうような状態なんだ。だがそれはおれの待ち望んでいたことであるような気もする。
クラウド　まだよくわかんないけど、やな予感がするってこと？　なんで？　それニブル行きに関係ある？
セフィロス　たぶんある。ないかもしれないが。ないのならほんとうにありがたい。だがわからない。おれにもわからない。
クラウド　あんたにもわかんないことってあるんだ。
セフィロス　（微笑んで）たくさんあるさ。おまえの機嫌とか。
クラウド　たまに地雷踏みぬいてくるもんな、あんた……わざとやってるんじゃないかって思うときあるよ。わざとじゃないってわかってるけど。……セフィロス。
セフィロス　ん？
クラウド　おれもなんだ。
セフィロス　……。（クラウドをじっと見つめる）
クラウド　（ソファの上で膝を抱えて）おれもすごく不安なんだよ、なんかさ。なんでだろ。よくわかんない。最初、ソルジャー試験落ちたから村に帰りたくないんだと思った。こないだまでそう思っ

てた。でもたぶん違う。なんか別の理由がある気がする。なにかはわかんないけど。変なんだ、おれ、最近。自分がなに考えてて、どうなってるんだか、自分でもわかんないとき、いっぱいある。頭の中、すごくぐちゃぐちゃって感じなんだ。

セフィロス　……おれのせいかもしれないな。おまえはおそろしく感じやすいところがあるから。

クラウド　そりゃさ、あんたが落ちこんでたらおれだって落ちこむよ。ただでさえ試験落っこちて落ちこんでるしね……でもそうじゃない気がする。なんか変だよ、おれも、あんたもさ。なにが変なの？　なにかが絶対変なのに、わかんないんだ、おれ。あんたもわかんないんじゃ、もう永久にわかんないんじゃないかって気がしてきた。

セフィロス　まさか。この世界に永続するものはなにもない。少なくともそれが救いだな、この場合には。また救いか。いまいましい二面性だ、なんだか時間にあしらわれているような気がする。その向こうでほくそ笑んでいるやつが神とかいうやつなんだろう、おそらくは。おれはなんの話をしている？　おまえの不安の話だったのに。

クラウド　あんたのだよ、正確にはね。

セフィロス　そうだった。どうもおれは混乱しかけているようだ。この漠然としたなにかに飲みこまれるとは思わないが……というのもだ、そうなったらどうなる？　おれがおれである点はどこからはじまる？　おまえがおまえである点は？　おまえとの境がわからなくなることはまあよしとしよう。

だがおれがおれでなくなる境界まで侵入を許可するのはばかげている。
クラウド　待ってよ、あんたなんの話してる？
セフィロス　わからない。もう少しでわかりそうなんだが……どうももどかしいな。すぐそこに答えがありそうな気がするんだが、手を伸ばしてみてもつかめるわけではないんだ。おかげでイライラさせられる。
クラウド　（不安げに）あんた大丈夫？
セフィロス　大丈夫だろう。ここにおまえがいて、波の音がして、あの白いカーテンが揺れていて、おまえの十日間の休暇が終わらないのなら。おまえの誕生日だったのに、誕生日らしいことをなにもしていなかったような気がするな。時計もないし、カレンダーもない部屋で誕生日とはちょっと滑稽な気もするが……それとも並外れて崇高なのか。いや、おれがぬけているからだろう、結局は。
クラウド　（立ち上がって）海行こうよ。こんな真っ昼間にだらだら部屋にこもってるからいけないんだ。家でじっとしてるとろくでもないこと考えるって母さん云ってたよ。（セフィロスの手をとる）
セフィロス　そうだな。ああ、おまえの手だ。（口づける）午後はなにをする？
クラウド　岩場のカニを全滅させる作戦を考えたんだけど。
セフィロス　ずいぶんおそろしいことを考えたな。だが、全滅か。一度くらいやってみても悪くはあ

るまい。日焼け止めを。今度こそ忘れずにおまえの全身に塗ってやらなくては。おまえの背中の日焼けには、ひどく責任を感じるからな。

第三幕

真夜中。月明かりはおさえられて部屋を照らしている。暗く、かすかに青白い室内。怠惰そうな長い影。白いカーテンは暗がりに浮かび上がって見える。

セフィロスとクラウド、ベッドの上に横たわっている。

セフィロス　眠ったのか？

クラウド　ううん……まだ。

セフィロス　大丈夫か。

クラウド　この期に及んでそういうこと云うやつ殺したい。

セフィロス　それはすまなかった。

間。

クラウド　おれ血が出たの？

セフィロス　ほんの少しだけ。痛みは？

クラウド　……ないみたい。

間。

クラウド　あのさあ。
セフィロス　ん？
クラウド　男とやるのと女とやるのって同じ？
セフィロス　（考えこんで）同じといえば同じだが、違うと云えばなにもかも違う。
クラウド　あんたの答えっていっつもそういう感じだよな。なんかこう、はっきりしなくってさ。
セフィロス　どうも断定というやつが苦手でな。
クラウド　ふうん。まあなんでもいいけど。おれ塩味しなかった？
セフィロス　塩味？
クラウド　うん。なんかさ、ここ来てから自分がずっとしょっぱい気がするんだ。
セフィロス　別に塩味とは思わなかった。おれはきっとこれがおまえの味だろうと思っていた。もともと、人間は少し塩味と云えば塩味だしな。
クラウド　そっか。

間。

クラウド　（起き上がって）あのさ、ぜんぜん眠くないんだけど。
セフィロス　そうか、興奮してしまったんだろう、無理もないが。
クラウド　体は眠いって云ってる気がする。でも頭が眠くない。冴えちゃたよ。夜中なのにさ。

セフィロス　それは困った……いや、なにもなかったかのように熟睡されても困るか。そうなるとどうもみじめな気分になるだろうな、あれこれ考えて……この子は気分よく眠ってしまったのだろうか、もしそうだといいが、なにも感じなかったというのではそれはそれで非常にむなしい、というようなことを。

クラウド　あんたの反省なんかどうでもいい。おれ散歩してこよう。

セフィロス　いまから？

クラウド　だって眠くないもん。

セフィロス　まあ別に危険があるわけではないし、明日起きる時間があるわけでもないが……。

クラウド　あんた寝てなよ。おれひとりで行くから。（ベッドから飛び降り、あたりをうろついて服を拾ったり着たりする動作）

セフィロス　（笑いながら体を起こして）やれやれ……おまえのような子ははじめてだ、当たり前だが。

クラウド　だいたいあんた、十も年下の男とまじめにつきあったことあんの？

セフィロス　ない。まじめもなにも、まるではじめてだ。

クラウド　じゃ、新鮮なの当たり前だよ。おれはかわいくしてる女の子じゃないよ。

セフィロス　かわいくしてる女の子とやらともつきあったことはないな。

クラウド　そういう子がさ、あんたと一晩一緒にいるとするだろ、きっと事件だと思うんだ。
セフィロス　だが悲しいことに、そんなことになったらおれはまずなんらかの罠かと疑うだろうな。おれのまわりは落とし穴だらけだから。実際に、色じかけ攻撃というやつにもたびたび遭ってきた。
クラウド　……あんたって、……おれ、いまちょっとかわいそうになっちゃった、あんたのこと。散歩やめようか？　一緒にいてほしい？
セフィロス　（笑いながら）いいや、どうかおまえの望みどおりに。それがおれの喜びになる。おれはこの窓からおまえを見て楽しむとしよう。
クラウド　じゃあ行ってくる。（退場）
セフィロス　（窓辺によりかかり、しばらく窓の外を見つめて）ああ、あの子が海岸を歩いて行くのが見える。白い服をまとって歩いていく彼は星のように見える。青白い炎をまとっているように。あれはどうも死の光のようだ……生命の光ではなくて。あの子は死を連れている……あの子は死を連れている。おれはそれを知っている。さっきその死はおれのうちに入った。そしておれの死になるだろう。あの子の身体は燃えていた。おれも燃えていた。われわれは永劫の死の淵に立っていた。あの子は少し血を流した。とても赤かった、暗がりでもはっきりわかるほどに。おれはそれを飲みこんだ……あの子は塩味なんてもんじゃない、破滅の味がする。破滅と熱情の味が。

セフィロス、夢を見るように窓の外を見つづける。長い間。

セフィロス　浜辺にあの子の足跡がついている……点々と。ここから見ると、なにか小動物の足跡のように……なにをしているのだろう。また岩場でなにか見つけたのか？　昼間はカニを全滅させにかかったが、それでは足りないのだろうか？　足りないだろうな、たかが岩場のカニごときでは。星のひとつも全滅させないことには、とてもあの子にはふさわしくないだろう。だが本人はそのことにちっとも気がついていない……自分がどれだけ破壊的な存在であるのかを……あの子のためにどれだけのものが滅びるに値するのかを。そうだ、おれだけがそれを知っている。おれだけに知ることが許されている。ありがたいことに、ひどく不思議なことに。なぜだろう。おれのこの不毛の人生がみんなあの子のためであったような気がする。あの浜辺を行く星のような子の……

急にはっとし、窓の外に目を凝らす。不安げに、急いでベッドから降り、ドアへ向かう。彼がドアノブに手をかけようとしたとき、扉が開く。クラウドが入ってくる。右手から血を流している。

クラウド　手のひら、切っちゃった。

セフィロス　（神経質に、不安げに）見ていた。岩場で？

クラウド　（うなずく）そのへんに手ついたら痛くてさ、びっくりした。鋭くなった岩が飛び出てたんだ。

セフィロス　傷は？

クラウド　（手をさしだしながら）大したことないと思うけど……。
セフィロス　ああ、傷は大きくはないが……おまえの血は自分の心臓から流れ出ているような気がする。気が遠くなりそうだ。（傷口に口づける）
クラウド　あんたが血を見たくらいで貧血起こすとは思えないけど。だってそしたら戦場でしょっちゅうぶっ倒れてなきゃならないもんな……なあ、あんた顔青いけど大丈夫？　震えてるよ？
セフィロス　おまえが怪我をするたびにおれは心臓が止まる思いをするんだ。
クラウド　なんでだよ、大げさだなあ。
セフィロス　大げさなものか。人間は死ぬんだ、ちょっと怪我をしたくらいでも。かすり傷程度だって、運が悪ければ死んでしまう。確か包帯があったはずだ。（クラウドをソファに座らせ、ランプをつけ、トランクの中から小箱を取りだして、クラウドの横に座る。）
クラウド　そりゃ、まあ、そういうこともあるだろうけど……でも、おれは大丈夫だよ。（消毒薬をつけられて）いたっ！　あんた救急箱なんてもってきてたの？
セフィロス　おれはいつでも持ち歩いている。おまえが死なないように。（包帯を巻きはじめる）
クラウド　なんでそういうこと考えるかな。前からそんなじゃなかっただろ？　あんたやっぱ変だよ、ほんとに。
セフィロス　変でけっこうだ。（黙々と包帯を巻く）

クラウド　（セフィロスをしばらくいぶかしげに見つめて）けっこうじゃない。あんた、おかしい。おれがちょっと手切ったくらいで、なんでそんな死にそうな顔してんの？　ほんとにぶっ倒れそうな顔してるよ。ちょっと、おれの手はいいからさ、いいって、やめろよ、おれの話聞けよ！

互いににらみあう。緊迫した間。

クラウド　（視線をそらし、泣き出しそうな声で）もうやだ。おれ耐えられない。

セフィロス　……なにに。

クラウド　あんたにだよ！

セフィロス　おれに？　おれがなにをした？　確かにこのところ、普段と比較すればやや情緒不安定とでもいうべき状態かもしれないが、おまえに迷惑をかけたおぼえはない。

クラウド　あーあーそーだね。確かにあんたはなんにもしてないよ。それが最悪なんだ。

セフィロス　なにもしていないことが？　わからないな。

クラウド　くそ、ぶん殴りたくなってきた、その顔。どうせいっつもおればっかりぎゃんぎゃん怒ってるんだ。あんた大人だからさ、そうやって余裕ぶっこいてられるんだよ。おれはガキだからね。しかもここ最近はへこんでて、あんた並みに情緒不安定気味なガキなんだ。

セフィロス　むくれるのは勝手だが、おまえに歳の話を持ち出されると、ときどきどうしようもなく不愉快な気分になる。不当だと云いたくもなる。どうすればいいんだ？　誰にもどうにもしようのな

いことに対して。おれが死んで一からやりなおせばいいのか？　そうすればおまえのほうが年上になって、いちいち年齢のことを持ち出されるおれの気持ちがわかるだろうな。

クラウド　おれそういう意味で云ったんじゃないだろ、いま。

セフィロス　おそらくはな。だがおれはそういう受けとり方をする。一種の反射神経だな。攻撃がくり返されるうちに形成されてしまった。（笑う）

クラウド　なに笑ってんだよ、いま笑うとこ？　ほんとに殴りたい。

セフィロス　こういうとき、おまえは手が出てくる。おれは口のほうが先に出る。おれも手が出るタイプでなくてよかった。きっとおまえを殴り殺してしまったろうから。たぶん両手を血に染めてから我に返るんだろうな。おれはどうするだろう？　おまえを殺してしまったら。可能性がゼロではないのが我ながらそら恐ろしく感じるところだ、まったく……ああ、そんなことになったらほんものの地獄が到来することになる。だがその地獄はずいぶん近いところにありそうにも思える。（額をおさえる）

クラウド　（長いこと、気遣わしげにセフィロスを見てから、非常に小さな、打ち明けるような声で）……あのさ、あんた、なに恐がってんの？　なにが恐いの？

セフィロス　（驚いて顔を上げる）恐がっている？

クラウド　うん。あんた、おびえてるみたいだよ、こないだから……ずいぶん前から。

セフィロス　おびえている……おれが？
クラウド　うん……だってそうだろ、どう見たって。妙に神経とんがらせてさ、ちょっとしたことでおれが死ぬんじゃないかとか思って、おれが試験落っこちたときだって、あんた、ちょっと普通じゃなくおれに気遣ってたよ。おれが明日にも首くくっちゃうみたいな扱いだった。なあ、ほんとに大丈夫？　こんなことおれが云うのも変なのかもしれないけど、ニブル行くのやめたら？　別にあんたがいなきゃどうしようもないような任務じゃないんだし。
セフィロス　恐がっている……おれが……おれが？　そうか、恐がっている……これが……ふふっ、ははは っ！
クラウド　（ぎょっとして）なんだよ、急に。とうとう頭おかしくなっちゃった？
セフィロス　（大笑い）いや……すまない、ははっ……頭がおかしくなった？　あるいはそうかもしれないな……いや、違う、断じて違う。おれはおかしいのではなくて、正常なんだ。いまそのことがわかった、おまえのおかげで。（楽しげにクラウドの顔をのぞきこむ）
クラウド　（身をよじって距離を保とうとしながら）ひとりで納得すんな。なんの話だよ？
セフィロス　おまえのおかげで、大変重要なことがわかった。これが恐怖というやつなのだということが……自分が恐がっているということが……自分がおびえていると。
クラウド　だって、見りゃわかるよ。落ちつかないし、悩んでるっぽいし、先に進むのが恐い人みた

い。

セフィロス　先に進むのが恐い！　ああ、すばらしい響きだ。（興奮したように立ち上がり、あたりを歩きまわる）

クラウド　どこが？

セフィロス　どこが？　すべてがだ！　実に人間らしい。やりたくない、好きじゃない、面倒くさい、意味がない、そして恐い！　おれはいま恐怖を味わっているところなんだ。（感動したように目を閉じる）

クラウド　だから、ひとりで勝手に納得すんなって。おれを置いてくなよ。

セフィロス　ああ、すまない、置いてけぼりにするつもりはまったくないんだが……それにしてもおかしくはないか？　このおれが恐がっているとは。

クラウド　（セフィロスをじっと見つめて）ううん、別に。誰だってやるよ、恐がるなんて。あんまりかっこいいことじゃないかもしれないけど。

セフィロス　なにを云う。実にすばらしいことだ、なにかを恐がるとは！　おれは生まれてこの方一度も恐怖を感じたことがなかった。

クラウド　それほんと？

セフィロス　（うなずいて）自分が死ぬ気がしないのに、なぜ恐怖を感じる必要がある？　どこにい

ても、おれは自分が死ぬという気がしなかった。砲弾が雨あられと降ってくるなかでも、暗殺者が山ほどひそんでいるなかをくぐり抜けるときにも。負ける気がしないというのとはちょっと違う……結果としては同じことなのかもしれないが。おれにはそれらのことがみんな現実だと思えなかった。つまりおれがほんとうにその場所にいてその場面を生きているのだという気が少しもしなかったんだ。

クラウド　じゃああんた、なんにも感じてなかったってこと？　そういうとき……普通だったら命の危険ってやつ感じるときに。

セフィロス　どうもそうらしいな。他人のことなら、考えたり感じたりもするのだが……自分のことなるとどうもおぼつかなかった。それでおれはずっとどこかでこう思っていた。おれはどうもおかしい、人が当然感じているものを感じることができないらしい。それというのも、おれが自分は死なないと思っているせいだ。そのとおり、おれは死にそうにない。ほかの連中はみんな、たとえソルジャーではあってもやはり生身の人間だが、おれだけはまるで不死身の生命体かなにかのようだからな、と。

クラウド　なに云ってんだよ。

セフィロス　いや、実際そうと云えなくもないんだ。手足が再生したりとかな。

クラウド　はあ？

セフィロス　傷が治るのが恐ろしく早いとか、おまけにほとんど痛みを感じないとか。

クラウド　……そりゃ、たぶんあんたが……。
セフィロス　ソルジャーだから。ご明答。だがな、おれはちょっと桁違いなんだ。たとえば、おまえがいつも持ちあるいているあのナイフでおれの心臓を刺したとしよう。おれはたぶん、一瞬は絶命に近い状態になるだろう。心臓から血があふれて動きが止まるだろう。だがナイフを抜いて数分もすれば、おれの心臓はまた動きだすだろう。そして一日か、二日もすれば、おれはもう刺されたこともわからないようになっているだろう。
クラウド　……それほんとなの？
セフィロス　ほんとうだ。やったことがある。実験してみた。自分で自分に対して。
クラウド　……。（体をこわばらせる）
セフィロス　そのときおれはまだ十代前半だったんだが、叱られるかと思いきや、褒めちぎられてしまった。科学屋の宝条というのがいてな、大笑いしていた。あいつにとってはなにか非常に愉快なことだったらしい。おれはといえば、どうもそんな気がしていたがやはりそうかと思ったものだ。おれは死なないんだ。おそらくは、飢えるか老いるかする以外、なにをしても死なない。首を飛ばしたことはさすがにまだないんだが、飛ばしたとしても近くに体がありさえすれば勝手にくっつくのではないだろうか。
クラウド　……。（青ざめて顔をふせる）

セフィロス　ああ、恐がらせてしまったか？　この話をしたのはおまえがはじめてだ。なぜこんな話になってしまったのか……気分のいい話じゃないな……悪かった。
クラウド　（あわてて首を振って）ううん、いいんだ……ちょっとびっくりしただけ。ちょっとっていうか、かなりだけど。
セフィロス　そうだろうな。すまない。
クラウド　別に謝らなくていいけど……でもさ、じゃあおれ、あんたの心配しなくていいんだな。
セフィロス　生きるか死ぬかに関してはな。病気もしそうにないし。いつだかおまえがこっぴどい風邪にやられたとき……どうしていいかわからなかった。風邪というものがどういうものか、どう対処すればいいのか、知ってはいたが……あのときのおれもおびえていたわけだ。おまえが死ぬかと思った。（クラウドの頬をなでる）
クラウド　（くすぐったそうに）死なないよ。おれもけっこう頑丈にできてるもん。あんたほどじゃないだろうけど。
セフィロス　（クラウドの横に座り、クラウドの手をとって頬にあてがいながら）おまえのことになれば、おれだって度を失うこともできる。血の気が引くことも。でも自分のことに関しては……自信とも違う、不動心を獲得したわけでもない、ただおれは死なない……いや、死ねないのだという確信があるだけなんだ。そしておれは自分がこの世のものでないような気がする。すべてのものはいずれ

傷つくか、病を得るかして死んでしまうのだが、おれはその必然の中にいないんだ。自分だけがなにかこの世の中心から外れているような気がしていた。おれはいったいなんなのか、という問いがいつも頭から離れなかった。なぜおれはこうなのか。なぜすべての生き物のようでないのか。

クラウド　……わかんない。ソルジャーだから……じゃないんだよな。でも、だけど、じゃあソルジャーってなに？

セフィロス　さあ、それがわからない。調べようとしたことは何度もあるが、できなかった。資料のある場所は目星がついているんだが、セキュリティがいろいろとややこしくて……とはいえ、調べられないことはないはずなんだ、本気になれば。だが本気にならなかった。やりようはいくらでもあったはずなのに、やらなかった……（笑いだす）おれはずいぶんいろいろと恐がっているようだ。ようやくわかった。おれはうれしい。

クラウド　うれしいの？

セフィロス　うれしいさ。自分が人並みの人間なんだと思える。なにかを恐がって、恐がっていることを抑圧し、見ないふりをして、あれこれ云いわけする。

クラウド　……そっか。

セフィロス　（急にソファに寝転がって）ああ、おれは解放された気分だ。実にいい気分だ。波の音がする。静かないい夜だ。待っているがいい、おれはつきとめる。自分が誰なのか、どこから来たの

か、なぜほかの連中とこうも違うのか。ああ、いい気分だ。おそれる自己を見つけ、その原因を見つける……なんと気分のいいことか！

クラウド　よかったって云っていいのかどうかわかんないけど、とりあえずあんたが気分よくなってよかったよ。おれずっと不安だったからさ。あんたがどうかしちゃったんじゃないかって。

セフィロス　（起き上がって、心から）そうだな、悪かった。ずいぶん不安にさせた。（クラウドを抱きしめて額にキスする）これで心置きなくおまえの休暇に便乗できる。あと何日残っている？

クラウド　一週間。カレンダーないから、ほんとかどうかあやしいけどね。おれの勘定じゃそうだよ。

セフィロス　一週間か。天体は勝手に回っているがいい。何日かずれたところでかまうものか。

クラウド　おれはちょっとかまうかな。おれの休暇だもん、やり過ごしたら、怒られるのおれなんだから。

セフィロス　そのときはおれの首を上官のところへもっていって、こいつのせいですと云ってやるといい。こいつが時間を超越したのですと。おれの首がきっと弁明するだろうさ。古代の弁論家よりも雄弁に！

クラウド　おれ銀の皿にあんたの生首乗せて運ばなきゃなんないの？　いやだな、きっとすごく血の匂いがするんだろうな。あんた自分で自分の首切り落とせよ。おれやりたくないよ。

セフィロス　お安い御用だ。きっとおまえのあとから首なしの体がついていくだろうさ。結構な見ものだろうな。通りがかりの連中がみんな悲鳴を上げるだろう。
クラウド　あんた楽しんでるだろ？　やなやつ。最後の最後にそういうこと云うからさ、みんな冗談だったんじゃないかって思っちゃうんだよ、おれ。
セフィロス　おれは冗談は云うが、嘘は云わない。おまえには、決して。
クラウド　それもわかってるけど……もうやめない？　この話。せっかくあんたいい気分になったのに。
セフィロス　黙れと命じてくれればいつでも黙る。ああ、おまえにずいぶん気を遣わせてしまったらしい。悪かった。いまこの瞬間から、おれはおまえの感情の奴隷に戻ろう。我が君よ、どうかご命令を。
クラウド　あーあ、はいはい。その云い方、いますぐやめないと、おれあんたに自分で自分を殺せって云うよ。
セフィロス　わかった。自死に関しては、命じられれば努力してみるが、どうだろうな。ふたりで方法を探してみようか、おれがどうやったら死ぬか。
クラウド　絶対やだ。
セフィロス　（楽しそうに）おれはな、どうもおまえがおれの死の鍵を握っているんだというロマン

的空想から離れられないんだ。おれを殺すとしたら、間違いなくおまえだろう。おれが死ぬとしたら、間違いなくおまえのためだろう。

クラウド　ああもう、その話やめろってば。

セフィロス　（うやうやしく一礼して）かしこまりました。それで？　話をやめたわれわれはなにをしよう？

クラウド　あんたいま何時だと思ってんの？　いや、時計ないからわかんないわけだけど、でも夜中だってことくらいわかるだろ。なにかするにしたって明日だよ。

セフィロス　そうだな、そのとおりだ。（窓の外を見て）実にうるわしい夜だ。

クラウド　明日、おれまた釣りしたい。今度こそ、なんかでかい魚を釣ってやるんだ。

セフィロス　間違ってサメだのクジラだのを釣りあげないように祈ろう。どうもおまえはそういうことをやりそうだ。そしてえらい目に遭いそうだが、最後には笑っていそうだな、楽しかったと云って。

クラウド　クジラって釣れるの？　どうやって？

セフィロス　（額に手を当てて）ああ、云わなければよかった。わかったわかった、明日やれるだけやってみよう。いまにも沈みそうな頼りない木の小舟と、たった一本の釣り竿で。そもそも海にほんとうにクジラがいるのかどうか、おれもおまえも見たことがないのだから、話はそこからだ。

2020/08/11

msd | Bliss

https://mors-et-benefica.com/bliss